

—解剖学者として、人間の命というものをどのように捉えていらっしゃるのですか。

人間に限らず生き物は、すべてがつながっているんですよ。

たぶん今の人は、昔の人とかなり違うところがあるとすれば、「一人で生きている」という感じじゃないですか。「個人」というのが強くなってきていると思うんです。

戦争中のことを言うと、あの時代はあとに残った者のため、仲間のため、家族のためという、個人の生き方というよりも集団の生き方をしていった。つまり「つながっている」という感覚が強かった。

昭和20年までは、少なくとも日本
の民法で家制度というのがありまし
たよね。今それがきれいに消えまし
た。なぜかと言うと、社会が人は個
で生きるといふうに作っているから
なんです。戦争が大きな原因で、

それまで一億玉碎なんて言ってたのに、今は全員バラバラですから。ホントに極端な国で、本当のことは聞にあるんだけどね。

——つながりを感じられなくなってきたということでしょうか。

たということでしょうか。

非常にはつきりしているのは、「田んぼっていうのは将来のあなたでしょ」ということが分らないんですよ。つまり、田んぼに稲が育って米が出来て、その米を食べるとそれが自分の体になるわけですよ。だから田んぼは将来の自分なんだという感覚。そんな感覚はもう全くないですよ。

昔は、人は土から生まれて土に返るって言ったでしょ。今は病院で生まれて病院で死んでますからね。魚を食べたら海をそのまま食べているっていう感覚。我々はいやだってつながってるんだけど、そういう感覚がなくなっちゃってる。

—現代では、なかなかそういう感覚を持つことは難しいです。

都会では人間以外の生き物がいなくなっちゃつてるでしょ。それって非常に特殊な時代ですよ、実は。

生き物って実は一匹で生きているわけじゃないんです。そもそも一匹だったら子どもは出来ませんから。自然に生えている木や植物を見てご覧なさい。いろんな種類のものが互

つながって
生きる

解剖学者として、長年にわたり「人間」を研究されてきた養老孟司さん。

その鋭い洞察力をもってさまざまな事象を明快に斬る養老先生にお話を伺ってきました。

い違いに生えているでしょ。それが
お互いが生きていく上でいちばん生
きやすいからなんです。

生き物の世界はもともと網の目のようにお互いにくつつきあっている。もつと言うと、我々の身体自体が本来はいろいろな生き物の集団で細胞そのものです。細胞内の中心体にあるミトコンドリアなんかはどんな生き物にも共通に住み着いている生き物だから。皆さんよく知ってるビフィズス菌だつてそうでしょ。

「『身体』といえば、先生は解剖学の研究で常に『死体』と向き合ってたわけですが…」

口も聞けない、動けない人を扱う
ということと同じです。だから当た
り前なんです。患者さんを扱うのと
どこが違うんですかっていうことで
す。

生きていても死んでも親は親、その人はその人なんですから。今の人は理屈で考えようとするから死んだ途端に客観的な考え方をするけど、生きている人と死んだ人に区別なんてない。「死体」っていうのは第三者、赤の他人について言うことなんです。だって、親や知り合いだったら死体なんて言わないでしょ。

—では、人間だけが持つ特性とは何でしょう。

人間の脳は、これはおもしろいこ

とに「同じにする」っていう性質を
持っている。だから言葉を使える。

「木」っていえば木、「魚」っていえば魚って認識するでしょ。魚にはイワシもいればサンマもいるでしょ。形も違えば味にもおもしろいものも違ふ。それぞれ違っているものを全て同じにするって乱暴なことですよ。だから動物は言葉を使わないんです。



▲その語り口は常に柔らかく、しかし容赦ない

例えば、飼犬は自分の名前を分かっているというけど、そうじゃないんです。なぜかというとな家族一人ひとりの声の高さが違うでしょ。犬は音の高低を聞き分けるので、家族がそれぞれ呼ぶのを違う名前前で呼んでいるように聞こえているんです。耳で音の高さを判定する器官ですから、あんな力アツムリのように

何でしょう。

まず、大人は必死で生きていました。戦争で食べるものがなくて大変だったから。そういう時って嘘がないです。ストレスは多いけどね。人に親切で助け合って生きてきた。

それから人が多すぎるんですよ。田舎に行つてごらんなさい。みんな人懐っこいから。わずか数十年でガラツと変わってしまった。人が多すぎて、逆に殺伐としているんだよね。

人間しかない。だから人を避けて
自ら孤独になって「孤立死」なんて
ことになってるんですよ。

—どこもかしこも都会化していると
いうことでしょうか。

いや、過疎地はいっぱいあるでしょ。でも、今の人はそういう所には住みたがらないんですよ。そして人の多い都会で孤立死しちゃってるんですよ。

岡山県は限界集落が一番多いって、日本で。気の毒だっていうのも分かるけど、70過ぎた爺婆ばかりいて、俺に言わせりゃ、なんて暮らし良い所なんだって思うけどね。なんでそういう所に爺婆ばかり住んでるかっつていえば、楽に暮らせる所だからでしょ。昔の暮らしを考えれば、分かるでしょ。

今の人って完全に頭が堅くなっちゃってるんだよね。限界集落なん

養老 孟司 (ようろう・たけし)

1937年 神奈川県鎌倉市生まれ。
1962年 東京大学医学部卒業。1年
のインターンを経て解剖学教室に入
る。以降解剖学を専攻。
1998年 東京大学名誉教授。
解剖学研究を進める中で言語表現に
関心を持つようになり、活動の場を評
論・エッセイの執筆など、文学的領域へ
広がっている。その深い洞察力から生ま
れる鋭い文章と、柔らかな語り口が多く
のファンを惹きつけている。



▲箱根の別宅のテラスから山の木々を眺める

が、実際は一人じゃ生きていけない。どうやって一人じゃ無理でしょ。震災の後で「絆」っていうのが盛んに言われていますが、今さらって思いますよ。そんなの当り前のことなんです、人と人の関わりがどうかってこと。

だから、まず命を考える時、個体で生きているんじゃない、いろんな生き物全てが集団で生きていると考えることです。

—話は変わりますが、東日本大震災以降、恐怖感や不安感からうつ状態になってしまいう人が増えたと聞きますが、そういった状態をコントロールすることはできるんでしょうか。

ていっても、そこに住んでる彼らにも子どもはいる。その子どもたちは全然心配してないでしょ。おばあさんが一生懸命イモ作って都会の子どもに送ってくるくらいなんだから。

—今、人と人の「絆」が大切だと盛んに言われていますが。

人は一人ひとりで生きています

コントロールっていうよりも上手に付き合うってことをしてほしいなと。つまり不安だっている人は、生きていくことに不安がないことを権利だと思っているんです。それはとんでもない間違いで、私だったら未開地のジャングルに行くのに不安のない人と一緒に行きたくないです

よ。なぜって危なくてしょうがないから。不安のない人って危険に対して一切注意しないわけでしょ。だから、ある程度不安なのは当たり前なんです、問題はその不安とどれだけ折り合っているかってことですよ。

—不安感は身体に影響を及ぼしますか。

それは不安になりすぎなんです。不安って当然あるでしょ、誰だって。生きている以上不安が無いなんてないんです。完全に安心っていったら死んだ人しかいない。

—ところで、ここには先生が研究なさっている虫の標本がたくさんありますが、なぜ虫を研究なさっているのですか。

普通の人には分からないかもしれないけど、虫だって植物だって具体的に調べ出すと際限ない。結局、我々が住んでる世界はどうなってるんだろうってことです。それをやってるだけです。

自然の状態がずいぶん変わってきたことは確かだね。虫は少ないし。ミツバチなんかもスズメも見なくなっちゃったし、どこ行っちゃったんだろうね。そんな時代っておかしいよ。全体をシステマ的にコントロールしようとしている。つまり何でも東京電力型でやるからね。

自然に戻ればいいと思っていますよ、僕は。

—最後に、養老孟司流生き方というのを伺いできればと。

生き方とかそういうことを無理に考えないことですよ。素直にすればいい。でもそうするとよく間違える人がいるんだけど、怠けてはダメですよ。若い人によく言うんだけど、本気でちゃんと仕事してるとお金は後から入ってくるからね。いくら働いても働いてもお金が入ってこないというのは、見当はずれに働いてるからなんです。相手のニーズでしよ、仕事は。人の役に立たなきゃお金なんかくれないのは当たり前じゃない。人の役に立たなくたっていいんだったら、俺なんかずっと虫ばかり見えますよ。



▲世界中から膨大な数の昆虫が集められ、その細部に渡り観察・研究している